

二十四歲

俵 萌子
二十四歳

講談社

© 1969

MOEKO TAWARA

第1刷 昭和44年3月31日

定価380円



Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

二十四歳

著者 俵 萌子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

振替東京3930

電話東京(942) 1111

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社馬場製本

目次

二十四歳——別れのあとに

1・「婚期」はあるということ

9

2・男性社員について

17

3・だれを好きなんだろう

24

4・二十三歳の五月

32

5・あなたが好きです	39
6・お別れします	47
7・お見合います	61
8・見合い旅行	69
9・まだ嫁に行かないの	76
10・なにかが物足りない	83
11・もう一人のあなた	98
12・トイレット・タイム	106
13・二度目のデート	111
14・さらってもらいなさい	127
15・辞表を書くとき	137

二十四歳——もうひとつの脱出

1・ラッシニのゆううつ 153

2・二十四歳・デッドライン 160

3・娘の帰宅時間 168

4・自分の城がほしいの 182

5・死んだ気で結婚するさ 191

6・ローズ色の靴を買おう 201

- 7・好きといって…… 209
- 8・いいお話ですよ 218
- 9・星の近い溪谷 227
- 10・独立適齢期 238
- 11・ぼくはノンポリだ 251
- 12・結婚とは何か 258
- 13・婚期のタイムリミット? 269
- 14・頼りない気持 276
- 15・脱出したい 283
- 16・別れの手紙 293
- 17・ひとりの旅 301

二十四歲

装 幀 枡折久美子

イラスト 林 永恵

二十四歳——別れのあとに



1 「婚期」はあるということ……

正月の一日に、いとこの洋子がきて

「明子さん。四日の日、訪問着貸してくれない」といった。

「貸す？」

「そう、明子さんの訪問着をわたしが借りて、わたしのをあなたに貸すの」

「とりかえっこ？」

「そう」

すまして洋子が答えた。

洋子は、明子の母の妹の長女。明子は次女である。同い年の二十四歳だ。どちらも、高校を出

て、OLぐらし六年になる。

洋子のいうには、就職した翌年の暮れに作った訪問着は、もう五回、正月に着た。六回も続けて同じ着物を、会社の新年交歓会に着ていくのはイヤだ。かといって、新しくもう一枚作るのもバカらしい。あなたもたぶん、同じご心境だろうから、どう、この際とりかえっこして着ていつては……というわけだ。

なるほど、考えてみれば、明子もいま着ている訪問着は、十九の年の暮れ、ボーナスと母親の足してくれた金で作った。

もう、五回。ことしの新年交歓会にも着てゆけば、六回着る勘定になる。

高木明子の会社は、毎年正月の四日が仕事はじめである。この日は、朝十時から一時間、社員の新年交歓会をやる恒例になっている。第一会議室から第三会議室までの仕切りをとばらって、社長以下三〇〇人、本社の社員は全員出席する。だれが決めたか知らないが、女性はその日、みんな着物を着てゆく。着ていないのは、新人のOLの一部（しきたりを知らなかったということと、まだ着物を作る金がないという理由で）と、企画部の江森係長という四十二歳のハイミスだけである。

社長の、年頭の挨拶、というのが十五分くらいあって、あとは、冷や酒とスルメで乾杯。ついで男子社員は、飲み食いに没頭する人種と、コップ片手に、会場をヤアヤア愛想をふりまいて回る種

族とに画然とわかれる。

OLは、回って存在を誇示したところで、出世に関係はなし、また相手にもされないの、たいていは、三々五々、片隅にたむろしている。

しかし、サービス精神の旺盛な男とか、女好きの男は、そういうグループを歴訪して

「高木さん、あんた、着物姿も、いいねえ」

「ことしこそ、お嫁さんにいきなよ」

「オヤッ、見ちがえた。いいですねえ」

まちまちな言葉をかけながら、女の子の着物姿を品定めして回る。

意中の人があるOLは、その人から

「あなたも、着物を着ると、グッと色っぽいねえ」

という声をかけてもらいたい一念で着てくる。そうでなくとも、一人だけ洋服というのは、かなりの意志と勇気を要する。かえって目立ってしまう。

四十二歳の江森係長は、いつだったか明子にいったことがある。

「女だけが着物を着てくるのは、女が自ら、職場の花だと自認しているようなものでしょう。その精神、甘いと思わない」

その精神、たしかに甘いとは思いますが、しかし、明子は考える。甘いにや、甘いかもしれないが、明子だって女である。年に一度ぐらい、職場の男性から、女として意識されたい。そういう色気は

捨て切れぬ。ほかの女の子が「キレイだ」「ぐっと色っぽいネ」とちやほやされているのを、鼻の先でせせら笑って、平然とはしていられない。

（江森さん、あなたは仕事のために、女を捨てておエライかもしれないけれど、わたしはまだ、女を捨てちゃいないのよ）

そんな気持ちだ。

いや、それどころか、明子は日本の会社にも、もっと陽性に、サラリーマンが人間にかえられる行事があつていいのではないかと、ときどき考える。

アメリカの会社では、クリスマスの前後に、そんな日があるというのを、なにかの本で読んだ。パーティをやつて、その日は気に入った同士、キスごめんであるという。公然とやるかわり、次ぎの日からはまた他人。ビジネス・ライクに戻る。まわりもそれについて、ネチネチいわない。そんな、大人っぽい遊びが、年に一回ぐらいあれば、愉快だろう。しかし、日本では無理かな。国民性が違うかもしれぬ。

明子自身、それでは、そこまで遊びができるかと問われれば、いささか自信がない。お遊びで、キスができるだろうか。キスして、明日はまったく他人でいられるだろうか。

明子の部の部長や、課長などは、明子も含めて、近頃の女の子は下ライになったという。首にキスマークがついていても平気な子がいるし、「デイトよ」なんて、サッソウと帰っていくこと

などを、その理由としてあげる。

が、明子についていえば、「今夜は、おデートよ」あたりまではいえたとしても、キスマークをつけて平然——なんていう神経はもちあわせていない。

けっして、ドライであるなどとは思えない。

ドライというのは、洋子のようなのをいうのではないだろうか。洋子は、いつだったか、明子の生理帯を借りて帰ったことがある。

こんどの着物の件にしてもそうだ。明子には、ひとの着物に手を通すということに心理的な抵抗がある。そうまでして、枚数があるように見せかけるといふことにも気持ちのひっかかりを感じる。

突然生理がはじまったからといって、ひとの生理帯を借りて帰ったり、着物のとりかえっこをしようといったりするのには、ドライというより、無神経なのじゃないか。

しかし、丸太ン棒みたいな神経で、ゴリ押しする洋子には勝てない。結局、とりかえっこするハメになった。

新年交歓会の日、明子は洋子の訪問着を着ていった。

「オーヤ、おニューですね」

まっさきに気がついて声をかけたのは、三浦浩子だ。明子と同じ年に入社して、いまは経理部にいる。

「アーラ、あなたも……」

「エヘヘッ、二十四になるまで売れ残るとね。もの入りです。毎年同じものを着てくるわけにいかないし……」

そのとき、貿易部の吉岡部長が二人のほうに歩いてきた。明子の胸がかすかに緊張する。着物姿について、吉岡部長が何かいつてくれるのではないかという期待があった。が、吉岡部長は

「オムコさん、見つかったかい」

三浦浩子に声をかけた。

「それがダメなの。部長さん、いい人、紹介してくださいさるっておっしゃったでしょ」

調子よく浩子が受ける。

「ダメダメ。君は理想が高いから」

「あら、そんなことないですよ。新春を期して、大バーゲンに踏み切りました」

「大バーゲン？」

彼は笑って、「よし、バーゲンなら考えておこう」

ちらっと明子に目を移したが、吉岡はなにもいわずに、隣りにやってきた福本総務部長と話をはじめた。